

ちよっといい話

コラムは 毎日新聞

打ちたい心が罪なのか。止める監督が悪いのか。今春から小学校で教科になった「道徳」。6年の教科書に載る「星野君の二塁打」はどうみればよいか。



星野君は少年野球の好選手。好機の打席で監督は犠牲バントを指示する。だが星野君は内心必ず打てると思っていた。結局、彼は打つ。二塁打で決勝点を挙げ、チームは上の選手権大会に進む。

監督は認めなかった。星野君がチームの約束を破り、輪

ka-ron 玉木 研二

火論

を乱したとして、大会出場停止を言い渡す。

組織の中の「協同」や「犠牲」の精神の大切さを説かれた星野君が、深く反省するといった趣向である。

学校の外では反発の声が少なくない。例えば――。

「伸び伸びプレーさせてこそ成長する」「組織のため、チームのためと従順な人間がいいのか」「果敢に挑むことが世を発展させてきた。型にはめるのはおかしい」

一方、監督の考え方と対応に賛成、共感する意見も当然

星野少年は打った

ながらある。実をいえば、私も監督に同情的である。メンツ丸つぶれなものな、と。これはあまり教育的理由ではないが、率直な気持ちで議論の一つにあっていいだろう。

道徳は戦前の修身復活批判を退け、1958年度以降、

教科外の時間として小中学校に取り入れられた。副読本などが使われ、偉人らにまつわる読み物に傾きがちだった。

いじめ問題などから教科化論が急進。他教科と同様に「考

え、議論する道徳」への切り替えをうたっている。

それならば、この物語も

△組織のルールを諭す監督――

反省する星野君――将来は

立派な協調者に▽といった図

式を示すより、枝葉が自由に

伸びる多様な議論を子供たち

から引き出すことだ。

「家族がスタンドで見ている

たのでは」「バントも重要な

作戦」「やっぱりカッコイイ

ところ見せたいし」……。

紋切り型の解釈ではなく、

相手や他人のさまざまな考え

方に触れ、共感もし、反論も

することが肝要だ。

こんな議論はどうか。

19世紀英国で、フットボー

ルの試合中に1人が突然ボー

ルを持って疾駆し、ラグビー

の起源になったという伝説。

あの「エリス少年」はルール

違反を犯したではないか。

さらには、ルール違反では

ないが、サッカーの時間稼ぎ

のパス回しをどうみる、など

も議論に出れば面白い。

人の世は「やりたい」事と

「やらせられる」事の葛藤だ

らけ。折り合いのつけ方に「唯

一の正解」があるはずもない。

(客員編集委員)